

〈圧政の下に〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

今、世界の注目を集める中東・アフリカ。激しい戦闘の下には無辜の市民らが暮らしている。イスラム過激派の圧政下で若い家族を襲った悲劇を描く本作は、ニュースが伝えきれない戦争の現実をありありと伝える。

西アフリカのマリ共和国。北側にはサハラ砂漠、残りの中南部はニジェール川沿岸の農耕地帯以外は乾燥地帯だ。海はない。マリとは現地語で「カバ」を意味し、首都バマコにはカバの銅像があるという。世界遺産にも登録された美しい古都ティンブクトゥにほど近い砂丘地帯に一二歳の少女トヤは父キダン、母サティマ、牛飼いの孤児イサンと仲良くつつましく暮らしていた。テントの家で、父はよくギターを奏でながら伝統の歌を歌ってくれた。トヤは父が大好きだった。

だが、街がイスラム過激派ジハーディスト（聖戦戦士）に占拠されて以来生

活は一変する。厳格なシャリーア（イスラム法）と恐怖政治で住民らを支配し始めたのだ。音楽、笑い声、たばこ、サッカー、不急の外出などが禁止され、違反者には容赦ない懲罰が与えられた。

街でも砂丘でも日本製のバイクやTOYOTAの車で兵士らは自在に走り回り住民を取り締まる。それでも、住民らは隠れて仲間音楽を楽しみ、少年らはボールを取り上げられると、ボールなしでアクシオンだけでサッカーの試合をするなど、静かな抵抗をする。ある女性は、極彩色の下派手な衣装の肩にニワトリを乗せてのし歩き、大声でわめき散らす。ボールも被らないが、兵士らは彼女を狂人扱いで黙認する。

だが、一般の住民への圧政はさらに狂気じみて重くのしかかる。魚売りの女性が命令（女は全員靴下と手袋を着けよ）に従わず手袋をしなかったとい

う理由で、公開の場でむち打ち四〇回。苦痛に耐えながら必死で抵抗の歌を歌う彼女は次第に力尽きてゆく。さらには、事実婚の若いカップルは、首まで地面に埋められ、投石による公開処刑をされる。結婚式を挙げないで子どもをつくったというのがその理由だった。

牛飼いの少年が自分の牛にGPS（人工衛星により地球上の自分の位置を割り出すシステム）と名付けて可愛がる微笑ましいエピソードに比べて、宗教に名を借りたこの時代錯誤な抑圧ぶりは衝撃的だ。そして、ついに父キダンにも不条理な裁きの日が…。

シサコ監督は、二〇一二年、イスラム過激派に占拠されたマリ北部の村で起こった残忍な公開処刑の新聞記事を読み、映画化を決意したという。初めはドキュメンタリーを考えたが、住民はカメラの前で自由に話せないの、劇映画の形を取った。ニワトリ連れの女性にもモデルがある。彼女の家で過激派リーダーが談笑し、見事な踊りを披露する場面があるが、精神の均衡を失った女性の家でのみ人間的になる過激派とは何か。残忍な現実を描きながら、思索的で静謐なまなざし、風景の美しさが強心に残る。



『禁じられた歌声』

フランス・モーリタニア合作映画 (97分)

監督：アブデラマン・シサコ

出演：イブラヒム・アメド・アカ・ピノ、アベル・ジャフリ、トゥルウ・キキほか

公開中

© 2014 Les Films du Worso © Dune Vision